



佐高

スーパー グローバル ハイスクール

SGH通信 2019

No. 25 (2019年11月8日発行)

佐高 SGH ファイル

高大連携課題研究プロジェクト 高1 地域課題研究 中間発表

2019年10月26日(土)に宇都宮大学を会場として高大連携課題研究プロジェクト高1地域課題研究中間発表が行われました。宇都宮大学はオープンキャンパスが開催されており、生徒は午前中にオープンキャンパスに参加し、午後に中間発表をすることができました。本年度も**宇都宮大学国際学部の松金公正先生**にお手配いただき、感謝いたします。また、宇都宮大学の先生方から専門的なアドバイスをいただきました。



1 発表でアドバイスをいただいた宇都宮大学の先生方

No.	学部	お名前	時間	教室	グループ
1	国際学部	栗原俊輔	13:00-14:30	4B51	3, 4, 32
2	国際学部	藤井広重	13:00-14:30	4B55	13, 16, 26
3	農学部	飯郷雅之	13:00-14:30	4A41	9, 10, 11
4	地域デザイン科学部	石井大一郎	13:00-14:30	4A42	5, 24, 25
5	地域デザイン科学部	大森玲子	13:00-14:30	4B41	6, 12, 23
6	地域デザイン科学部	長田哲平	13:00-14:00	4B42	1, 2
7	地域デザイン科学部	中村祐司	13:00-14:30	4B54	19, 21, 30
8	教育学部	石塚諭	13:00-14:30	4A43	7, 8, 31
9	教育学部	小野瀬善行	13:00-14:30	4B52	27, 28, 29
10	教育学部	陣内雄次	13:00-14:30	4B53	18, 20, 22
11	工学部	大庭亨	13:00-14:30	4A44	14, 15, 17

2 生徒の振り返り

宇都宮大学の中間発表を通して、現在の研究の良い点や改善すべき点を把握することができた。良い研究にするために必要となる具体的なデータや詳しい流れを知ることができた。私たちのグループでは廃校をテーマとして課題研究を進めている。今までの研究では廃校は取り壊しに多額の費用がかかったり景観を害する存在になってしまうという理由で、地域活性化のためにも活用すべきだと考えてきた。しかし、今回の中間発表で地域住民の多くは賛成するかもしれないが、市の行政の立場になってみると経済的に取り壊した方がよいことが分かった。また、仮に廃校を活用したとして、どのように何を目的として活用するのかを明確にすべきだということが分かった。今回の中間発表を通して自分たちの研究をどのように進めていくか、また、そのために具体的に何を調査し、どんなデータが必要となるのかをしっかりと調べていきたい。これからは、様々な視点から研究を進めていきたいと思う。

1年3組 平渡 和己 (廃校問題班)

基本的な調べが足りなかった。実験方法、使用する器具、結果から得た考察まで、「何故そうなるのか」という根拠を自分たち自身でしっかり再確認し、実験に関わる知識や情報は抜かりなく調べておく必要があると思った。また、スライドに関しても「赤と緑色の文字は人によっては見分けられない人がいるため一緒に使ってはいけない」「タイトルを見ただけで人が発表に惹き込まれるような面白いキャッチフレーズをつけるとよい」などといったたくさんのアドバイスを頂くことができた。指摘されて初めて気づくことがほとんどで、研究の方針も発表内容もスライドも盲点だらけだったなと感じた。領域別発表会まであと少しあるため、今回のアドバイスと自らの反省を生かしてもっと良い発表にしたい。 1年3組 五十嵐 羽音（魚粉班）

今回の中間発表を通して、私たちのミスや曖昧になっている部分を改めて指摘していただいたので、最終発表に向けてより良い発表となるよう頑張っていこうと思う。指摘された所を班のメンバーで話し合い、もう一度「最終的な焦点」を改めて決め、みんなが理解し、題名も変更する方向でいきたいと思う。同じテーマの8班の人たちともよく話し合い、協力して「がん検診」について研究をしていきたいと考えている。宇都宮大学の先生や学生の方々のアドバイスを有効活用したい。 1年2組 今野 綾音（がん検診率向上班）

今回の中間発表では、様々な角度からアドバイスや質問がありました。論に対して資料を使い、因果関係を示す必要があると質問を通して分かりました。また、最初から最後まで矛盾点が存在しないかを確認することも重要だと学んだので、班員で確認していこうと思います。確認内容として、リサーチクエスチョンに対するanswerがあるか、正しいかなどがあげられます。アドバイスを無駄にしないようにきちんと改善して、より良い研究にしていこうと思います。 1年2組 高橋 加奈（不妊治療班）

事前の準備や班員としっかりと共通理解をしながら協力して発表することができた。そのため、大学の先生や学生の皆さんから適切なアドバイスをもらうことができた。主なアドバイスとして、タイムラインの考え方を研究すべしということ、自分たちの展望の難しさ、ハザードマップの難しさの説明を加えるべし、SDGsの広げ方、これらをすべて含めて視野を広く持つべしということを得た。ハザードマップの難しさというのは、自分たちの班はただ避難訓練の方が人々の関心が高く、ハザードマップは少ないとまとめただけだったが、なぜそうなってしまうのかということの研究するのも面白いということであった。これらはすべて自分たちでは気づけなかったことであった。また、最後には「着眼点が面白い」などといった非常にうれしいコメントを残して下さったので、引き続き研究を頑張ろうと思った。 1年4組 田村 璃空（災害班）

発表を終えた後のアドバイスの中に、「紙と話しているみたい」というものがあった。複数の人に頂いたアドバイスなので気を付けたいと思った。確かに、人の顔を見て話さなかったら伝えたいことなど何も伝わらないと改めて思った。他にもいくつかアドバイスを頂いたが、どれも基本的なことだった。これからは、いただいたアドバイスを生かして本番に向けてできることをやろうと思う。より良いものにしていきたい。人の顔を見て話す。リサーチクエスチョンに対するアンサーを明確に。目立つ所と目立たせない所に差をつける（パワポ）などアドバイスをいただいた。 1年4組 渡邊 千尋（赤ちゃん班）

【内容面でのアドバイス】なぜキャンプ場に注目したのかを述べるべき。自分たちが考えている「活性化」とは何かを伝えるべき。RQは5W1Hの方が好ましい。仮説の後に、この研究を通して自分たちは何を明らかにしていくのかを述べるとよい（3つぐらい）。オリジナルな着眼点を大切に、研究を進める。【振り返り】今回の発表を通して、ほめて頂いたところは、自信を持つことができました。また、自分たちの研究を深められるようなアドバイスや、自分たちでは考えつかないようなアドバイスを頂くことができ、とても貴重な経験となりました。ここで学んだことをしっかり生かし、残りの時間、班の仲間と頑張っていきたいです。 1年1組 山崎 理紗子（キャンプ場班）

本番前に全員で原稿を確認したところ、いくつかの抜け落ちている点を見つけたため、アドリブの形で入れることになった。トータルで10分ほどになってしまい、反省している。宇都宮大学の先生や学生の皆さんからの意見は、聴いていただいたゼミの方々の研究と通じるところが多々あって、協力していただきたいと思った。プレゼンの構成としてリサーチクエスチョンの後のアンサーの欠落を指摘されたので、付け足していきたい。全体的な収穫は大きかったので、プレゼンをもう一度見直し、より良くしていきたい。 1年1組 江部 青飛（メニュー多言語班）